

5-6					
主題	腰痛緩和を目指し介護支援用ロボットを使用し得た成果と課題				
副題	使いこなす難しさと、環境因子による弊害、次世代への期待				
キーワード 1	介護支援用ロボット	キーワード 2	腰痛緩和	研究(実践)期間	5ヶ月

法人名・事業所名	社福) 東京栄和会 千代田区立一番町特別養護老人ホーム				
発表者(職種)	佐藤麗子(介護職員)、古賀健児(介護職員)				
共同研究(実践)者	横張真理恵(介護職員)				

電話	03-3265-6131	FAX	03-3265-6136		
----	--------------	-----	--------------	--	--

事業所紹介	平成 7 年都市型総合福祉施設として開設。最上階に区民プール・1 階にレストラン・地下に多目的ホールを整備し、中間層に 82 床の特養事業・短期入所事業・通所事業および地域包括支援センター・居宅介護支援事業所を設置し、地域住民にとって高齢者福祉サービスの拠点且つワンストップサービスを提供することのできる総合福祉施設です。				
-------	---	--	--	--	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

当施設では、移乗介助時にスライディングボードを使用する利用者は少なく、基本的には職員 1 人でのターン移乗、もしくは職員 2 人介助にて抱え上げる方法がほとんどであり、スライディングボード以外の物品がないのが現状。また、車椅子の形状などの理由でスライディングボードも使用ができない場合がある。その環境下で、移乗時に軽介助が必要な方が約 24 名、全介助が必要な方が 27 名おり、利用者 1 人あたり 1 日 4 回～6 回程度の移乗に加え、排泄介助や入浴時の移乗介助なども加わってくる。

平成 30 年 6 月、介護職員へ腰痛の有無や介護支援用ロボットに関するアンケートを実施。入浴介助・移乗介助・ベッド上での排泄介助など、多くの場面で腰痛を感じているという解答が多く、それぞれコルセットの使用や、整体に通うなどして仕事を継続している状況である。また、介護支援用ロボットに対する印象は、使いこなせるか心配、腰痛が楽になるのであれば使用してみたいといった内容であり、実際に興味がある職員は半数程度であった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

目的：介護従事者の働きやすい職場環境を整備するため、腰痛対策として介護支援用ロボットを使用し、職員が腰痛を感じやすい入浴介助時と、疲労がたまりやすい夜勤時の 2 チームに分かれ、身体的負担軽減を図る。

また、介護支援用ロボットを現場で使用し、介護従事者の腰痛軽減にどの程度効果があるのかを検証していくことで、介護支援用ロボットへの考え方や、今後腰痛対策にどのように取り組んでいくか、利用者の反応や影響なども含め、現場の職員が考えるきっかけにもなるのではないかと期待している。

《3. 具体的な取り組みの内容》

はじめに、平成30年6月に実施したアンケート結果を元に、入浴チーム・夜勤チームそれぞれ5名ずつ職員を選出。検証期間は平成30年7月から平成30年10月までの4ヵ月間。介護支援用ロボットの使用方法に関して講習を受け、実際に装着した状態で業務にあたる。

具体的な使用場面は、入浴介助時の約2時間程度と、朝の起床介助を含む移乗介助、夜間帯のベッド上での排泄介助、体位変換時とし、夜勤時は常時装着はせず、その都度装着し介助にあたり、それぞれ介護支援用ロボットを使用する前と、使用後の腰痛の感じ方の違いを、5段階評価にてアンケートに記入していく。

《4. 取り組みの結果》

今回の検証で感じたメリットは、「立ち上がりや、低い位置から利用者を抱えあげる際の補助が受けられ、装着していない時よりも楽だった。」「移乗時、介護支援用ロボットの腰部分が、利用者にとって握りやすい位置にあり良かった。」。デメリットは、「装着に時間がかかる。」「機械の重さで腰が痛くなってしまう。」「幅があるためスペースが必要。」「うまく補助を感じられないことがある。」といった内容であった。

検証後、実習に来ていた学生より「授業で介護支援用ロボットを使用している。」との話があった。学生のころから介護支援用ロボットに触れ、学んできた次世代の介護職員であれば、今の現役職員よりうまく使いこなすことができるのではないかとということが分かった。

《5. 考察、まとめ》

今回、介護支援用ロボットの使用期間が限られており、操作方法や動き方に慣れるまでに時間がかかってしまったが、長期的に使用継続していくことでうまく補助を受けられるようになり、腰痛緩和につながる大きな可能性があるという総論に至った。

また、介護支援用ロボットを実際に使用したことで、機械の軽量化や通気性、着脱のしやすさなどの改善案があがり、職員一人ひとりが今後の可能性に対し前向きに考える、非常に良いきっかけになった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(関係者)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

サイバーダイネHP

https://www.cyberdyne.jp/products/Lumbar_CareSupport.html (2018年7月2日閲覧)

《8. 提案と発信》

今回の検証で、介護従事者の人材確保が更に困難な時代となり、外国人人材受け入れや、現役職員の体力面・精神面での負担軽減を目的とした介護支援用ロボットの本格的導入、タブレット端末・VR・テレビ電話・巡回型ロボットなど、新しい物を積極的に導入していくことで、離職率の低下や、次世代の人材確保・育成につなげていきたい。また、働きやすい環境作りが求められている一方で、利用者の多様化するニーズにも合わせていく必要があり、幅広い視野で柔軟に対応していける現場作りを目指していきたい。